

---

# 戦後における実用英語辞典の発展

——ユーザーとして制作者として——

橋 本 光 憲

---

## 目 次

はじめに

- 1 勝俣銓吉郎編『新英和活用大辞典』とその信奉者達
- 2 羽田三郎編『英和貿易産業辞典』とその流れ
- 3 橋本光憲編『経済英語英和活用辞典』
- 4 東洋経済『経済用語和英辞典』に始まる専門辞典
- 5 橋本光憲・信達郎編『英和金融用語辞典』と同類の辞典
- 6 田久保浩平・橋本光憲編『英文ビジネスレター文例大辞典』
- 7 実用英作文辞典・マニュアル類
- 8 今後の方向

おわりに

## は じ め に

1951年から1960年までの戦後の一時期、私はアルバイト学生あるいは駆け出しの社会人として、政府の外郭団体で断続的に技術・経済情報の和英翻訳に従事した。対象とした分野は、アルミニウム精錬、硫酸アンモニア・苛性ソーダ製造、製塩、船用内燃機関、農業機械、農業開発支援などと、実に多岐に亘っていた。

日本の敗戦の昭和20（1945）年からまだ日が浅く、本格的な出版物も少なく、基本的資料としては研究社の『新英和大辞典』（初版1927年、第2版1936年、戦後改訂は第3版1953年）、『新和英大辞典』（初版1931年、増補版1949年、全面改訂版は第3版1954年）に収録された専門用語以外では、頼れるものは市川三喜、畔柳都太郎、飯島廣三郎共著『大英和辞典』富山房、1931年など、二、三の他社の戦前版英和・和英大辞典、中辞典類に限られていた。

従って、当時翻訳をするに当たっては、夫々の業界の用語辞典などの出版物に頼るか、今日の同時通訳の人々が行うような、その時々に応じた用語集作りを行った上で、翻訳作業に取り掛るといった手間をかけていた。その中で昭和24（1949）年6月に刊行された東洋経済新報社の英文経済雑誌オリエンタル・エコノミストの手に成る『経済用語和英辞典』はポケット版に近い小辞典であったが、技術用語を含めた頼れる一冊であった。

一方、英作文辞典としては、一般の英和、和英辞典とは異なり、言葉の連語関係（collocation）重視の観点から作られた研究社『新英和活用大辞典』（勝俣銓吉郎編、初版1939年、戦後改訂版一第2版1958年）がある。私はある都市銀行の外国部で5年余（1956～1962年）来る日も来る日も英語の手紙を書き、時にはスペイン語の手紙の英訳をしていたが、毎日お世話になったのが、この勝俣の『英和活用』であった。

その後、営業店に転出して外国為替の実務に従事し、後に融資関係に転じ、更に支店管理職に回ってからは、英語の「書き手」になる機会は漸減していったが、一方海外で仕事をするが多くなった。かたわら、1985年から出版関係に手を染め、辞書作りの仕事にも関与するに至った。この機会に、ユーザー、制作者双方の立場に立って、戦後日本の実用英語辞典出版の軌跡を辿って見ようと思い立った次第である。

## 1 勝俣銓吉郎編『新英和活用大辞典』とその信奉者達

——勝俣銓吉郎編，研究社『新英和活用大辞典』全1525ページ，研究社，第2版，1958年。(英文名：Kenkyusha's New Dictionary of English Collocations)

### (1) 勝俣の『新英和活用大辞典』

同書は，そのカバーで“A Word Finder”と銘打っているが，編者が戦後の昭和33（1958）年，「新版の刊行に際して」と題して述べた「まえがき」の一部を，以下に引用する。

辞書は語の意義をあきらかにするのがその本領である。わが国における英語を例にとれば，そのために変則的には和訳・和訳による英和辞書があり，正則的には原訳，すなわち英訳による英英辞書がある。

ところが，わたしの『英和活用大辞典』は，これらの英辞書とその類を異にして，語義を示すのではなくて，語が他の語と慣習的に結合して一つの表現単位をなすその姿を広く採集し，これを文法的に排列したもので，その狙いは英語活動態（English in action）を展示しようとするにある。

こういう観点から編集された辞書は，もちろん，英語にはなく，おそらく他の国語にもないと思う。わたしの辞書が新機軸を出したものであろう。語の意味だけでなく語の結成型を対象にした辞書は，わが国の英語知識が字で生れ，語で立っているだけで，連語（collocation）によって歩くという域に達していない現状から見て大いに意義ある存在と言えよう。

『英和活用大辞典』は，いまから二十年前（詳しくは昭和十四年四月）に出版されたもので，その内容はわたしが三十年ばかりの間に集めた十二万のコロケーションを収録したものであるが，今回刊行の『新英和活用大辞典』には，その後に採集した資料を加えてあり，コロケーションの数は二十万に近いものになっているであろう。すなわち，前後半世紀にわたるノートブック・ハビットの結晶で，そのためにわたしの目を通した文献はこれを普通のページに直すと何万ページという膨大なものになるのである。で，その文献は主として，いわゆる popular English に属するものであって，文学に属するというより，むしろジャーナリズム

に属するものである。というのは、わたしの目標は美辞麗句を集めるのではなく、また特殊の難句を集めることでもなく、達意を主とした英文の姿を集成しようという考えであったからである。

この勝俣の英和活用辞典の戦前版は次の通り、『英和活用大辞典』の名前を冠している。

——勝俣銓吉郎編『英和活用大辞典』全1938ページ，研究社，1941年。（英文名：*Kenkyusha's Dictionary of English Collocations*）

神奈川大学図書館（横浜キャンパス）所蔵の本書を見ると、「序」の日付けが昭和14年3月，昭和16年4月18日印刷，昭和16年4月20日発行と、「序」より2年後の印刷・発行であり，時間のずれがある（この間の事情は不明）。なお，同書自身は昭和25年3月5日第3版発行の戦後版のものである。

以下に「序」の一部を再録しておく。

（前略）

活動している英語の姿を捉へ来って一つの辞典を編纂する場合，第一に起る問題は排列の問題である。本書の排列は，英語中の主要語である名詞に最も重きを置き，これに動詞・形容詞及び前置詞を配し，また動詞には副詞又は副詞性の連語及び前置詞を，そして形容詞には副詞・前置詞を配するようになっている。

この排列法は明治四十二年刊行の神田・南日の「英和双解熟語大辞典」の基礎仕事を私がやった時始めて採用したもので，今回亦復本書に採用した訳で，これが二回目である。一般の英語字書は総てこの排列法に依っていない。

名詞を主にして，これに他動詞を配する形を最も重要視した訳はこうである。Sentenceは通則として動詞を要する。従って動詞は表現単位として重要な位置を占め，sentenceの魂とさえ言われている。英語の動詞の大多数は他動詞であり，また総て語の連結を支配する親和力の色彩がtransitive verb+objectなる連語に於て濃厚に現われているので，その連語は極めて重要な表現単位を成すのである。この方面の著作は，海外に於ては，絶無であったが，昨年始めてロンドンからBadgerとRodaleの共著The Verb-Finderが刊行された。私は大正九年にその類本「英和活用五千句」という小著を公にした。



そこで蒐集した材料はどんなものであるかという点、これは主として私が過去三十余年に亘り、英語表現に必要な構材を専ら時文から収録したもので、これも亦私が常に実行している note-book habit の一産物である。本書に採用した構材は凡そ十二万に上っている。

要するに、本書は造った字書でなく、出来た字書である。そして、動かない英語に活を入れ、英語の知識の運用を確実ならしめることがその編纂の眼目となっている。(以下略)

「序」からは編者の著述の目的がよく解るし、発行日付をこの儘読めば、まさに日本の第二次世界大戦参戦(大東亜戦争開戦)——昭和16年12月8日——の前夜であったことが分るのである。

## (2) 新編『英和活用大辞典』

この勝俣の『英和活用』の後身として、1995年7月新発売されたのが、次の辞典である。

——編集代表市川繁治郎『新編英和活用大辞典』全2782ページ、研究社、1995年。(英文名: *The Kenkyusha Dictionary of English Collocations*)

前著第2版から数えても実に37年振りの新版である。如何に勝俣の『英和活用』が英作文辞典として長い寿命を誇ったかの証左でもあろう。私もその恩恵に与った一人である。しかし、戦前からの用例がいかにも古いというのが世評となって、出版社も改訂に踏み切ったのであろう。

一般に原著の見直し(特に他者による)は「新しく作るより大変だ」と言われるので、新版が原著に必ずしもこだわらずに編集を進めたというのは、賢明な策であったと言えよう。新版の帯紙では次のように謳っている。

英語を書くための38万例  
『新英和活用大辞典』をさらに発展進化させた新刊。

英語を書くための用例を現行版の20万から38万に増強。  
実質的に記述の80%が新記述。  
日頃英文を書くユーザー必携の辞典。

次に、新版の「まえがき」から、二、三参考になりそうな事項を引用しておく。

この辞典は勝俣銓吉郎氏の『新英和活用大辞典』（以後『活用』）を改訂する仕事から生まれたものです。勝俣氏は今さら紹介するまでもなく、卓越した英語力をもった日本の英学史上の巨星のひとりです。そして、明治30年代にジャパン・タイムズの記者として英語を書かれ、その後東京府立第四中学校、早稲田大学商学部などで教鞭をとられた体験から、日本人が英語を書くためには和英辞典だけでは十分でないと痛感され、1939年に完成をみる『活用』を編纂されるようになりました。この『新編英和活用大辞典』もまた、英語を書く際に利用していただくことを第一の目的として編集に努めてまいりました。

書名に使われている「活用」は勝俣氏の造語と見受けられますが、初版（1939年）の序文にある「動かない英語に活を入れ、英語の知識の運用を確実ならしめること」がその意味するところ です。そして英語を「活用」させるために勝俣氏は、文を構成する単位である「連語」（collocation）に着目されました。また『活用』増補版（1958年）の「まえがき」では、この辞典の性格を「語が他の語と慣習的に結合して一つの表現単位をなす姿を広く採集し、これを文法的に排列したもの」とされています。（中略）

『活用』増補版の「まえがき」をふたたび引用すれば、勝俣氏の「前後半世紀にわたるノートブック・ハビットの結晶」である『活用』からは、まさに手作りの「個人辞典」の感触が伝わってきますし、氏の用例採集の労は語りつがれて伝説化しています。ただ編纂の段階では氏自身が「視力減退のため」校正に当たられることができなかったなど、人的・時間的な制約からかなり無理があったと推測されます。たとえば「偶発的な語と語の結合」と思われる用例が相当数収録されていることは否定できません。そこで1985年に市川繁治郎先生を中心に、企画の段階から英米人執筆者の実質的な参加を得て開始された今回の改訂では、旧版の全面的な見直しを行ないました。その結果、名実ともに面目を一新しえたと自負し

ております。

### (3) 旧版と新版の比較

どんな立派な辞典とは言っても、多少の誤謬を免れるものではない。日本人が誤り易い語法として、他動詞の目的語に前置詞を付けないこと、例えば discuss on..., study about[on] ..., stress on...などが挙げられている。勝俣の『英和活用』では、**discuss about merits and demerits** 功過を論じる (第2版, p. 353) があり、規範的立場からは誤りであるとされている。<sup>1)</sup> (なお、この discuss about は戦前版から入っているようである。)

意地悪をする訳ではないが、[動詞] discuss が旧版から新版でどう変わったか、帯紙の言うように「実質的に記述の80%が新記述」になっているかの検討例として比較して見よう。

#### 〔旧版〕

**discuss**, *v.* 論議する。

**M** No man in America is better fitted to *discuss* it **adequately**. 米国でこの人以上その問題を十分に論じるに適した人はない。¶ **exhaustively discuss** 徹底的に論じる。¶ **discuss freely and rationally** 自由かつ合理的に論じる。¶ **fully discuss** the matter 論議を尽す。¶ **discuss geographically** 地理の観点から議論をする。¶ **discuss glibly** とうとうと論じる。¶ **keenly discuss** 盛んに論じる。¶ **thoroughly discuss** the matter その件を十分に論じる。¶ The question was **warmly discussed**. その問題は盛んに論議された。

**P** **discuss about** merits and demerits 功過を論じる。¶ **discuss a matter at** a meeting (conference) 会合(など)の席である件を討議する。¶ We entered a tea-room, and *discussed* the question **over** tea and cakes. われわれは喫茶店に入って茶菓を喫しながらその問題を論じた。¶ **discuss with** more prejudice than reason 条理を立ててと言うよりはむしろ偏見にとらわれて論じる。¶ **discuss the matter with** him 彼とそのことを話合う。【類】 **discuss** politics (literature, business) **with**...

〔新版〕

**discuss** *v.* 論議する, 話し合う, 論じる。

〈副詞 1〉 It was difficult to *discuss* the issue **adequately** in the time available.与えられた時間内でその問題を十分議論するのは困難だった/*discuss*…**animatedly**…を活発に議論する/*discuss*…**argumentatively**…を理屈っぽく論じる/*discuss* **avidly**…the latest films 最新作の映画について熱心に論じる/In the last scene of the movie a father and his sons **bitterly** *discuss* the past.その映画の最後の場面では父と息子たちがそれまでの過去のことを激しく議論しあっている/If we *discuss* our differences **calmly**, we'll soon iron them out.私たちの意見の相違を冷静に話し合えばその相違はじきに調整できる/He **calmly** *discussed* with them what they should do.何をすべきか彼らと落ち着いて議論した/*discuss*…**critically** [**eagerly, exhaustively, extensively**]…を批判的に[熱心に, 徹底的に, 幅広く]論じる/Drug abuse is a problem that cannot be **elegantly** *discussed*.麻薬の乱用は上品に論じてはいられない問題だ/I *discussed* **frankly** with him our need for better communication between offices.オフィス間でもっと連絡を取りあうことが必要だと彼と率直に話し合った/*discuss*…**freely and rationally**…を自由かつ理性的に論じる/*discuss*…**fruitfully** …について実りある議論をする/**fully** *discuss* the matter その件で議論を尽くす/*discuss*…**gravely** [**glibly, intelligently, lucidly**] …を深刻に[とうとうと, 理性的に, 明快に]論じる/*discuss*…**heatedly** …について白熱の議論をする/**keenly** *discuss*……を盛んに論じる/*discuss*…**passionately** [**protractedly**]…を熱烈に[だらだらと]論じる/He *discussed* **penetratingly** its effect on the earth's atmosphere.それが地球の大気に及ぼす影響について透徹した[うがった]議論をした/*discuss*…**seriously** …について真剣に議論する/**thoroughly** *discuss* the matter その件を徹底して論じる/The question was **warmly** *discussed*.その問題は熱心に議論された/*discussed* **widely** 広く論じられた。

〈+前置詞〉 The question was widely *discussed* **among** intellectuals.その問題は知識人の間で広く論じられた/They *discussed* the proposal **between** themselves before giving an answer.その提案に対して答えを出す前にお互いにそれについて意見を交わした/They *discussed* the business deal **over** lunch.昼食をとりながら商取引の話をした/They *discussed* **with** passion the latest

political developments.最近の政治情勢を熱をこめて論じた/*discuss* the matter **with** him彼とそのことを話し合う。【類】*discuss* politics [literature, business] **with** one's friends.

〈+doing〉 We *discussed* going to France for our holidays.休暇でフランスへ行くことについて話し合った/ 〈+wh.〉 They *discussed* what to eat and where.どこで何を食べようかと話し合った/We *discussed* how the difficulty could be overcome.どうやってこの苦境を乗り越えるかについて話し合った。

流石に、新版では旧版の *discuss about*…を削除している。修飾語 [副詞] の数は、旧版が10に対して新版は29に増えている。前置詞は4 (*about* を含め) から4で変わらない代りに、新たに 〈+doing〉 と 〈+wh.〉 の慣用的表現を加えるなど、改善・工夫の跡が見える。

#### (4) 『英和活用』の価値

旧版20万、新版38万という用例の多さが、活用辞典の生命であることには間違いはないが、それと同時に勝俣の『英和活用』が文例仕分けの大きな枠組みを示したことは、用例の多さに勝るとも劣らぬ英作文向上につながる大きな価値と思われる。

今回の新版では、旧版の枠組みを多少変更して、表紙カバー裏に「本辞典の構造」として次のように示してある。

#### 本辞典の構造

##### ■名詞見出し

- 〈動詞+〉 .....その名詞を目的語にとる他動詞(句) を記述
- 〈+動詞〉 .....その名詞が主語になって従える動詞(句) を記述
- 〈形容詞・名詞+〉 その名詞と結びつく形容詞ならびに形容詞相当語句を記述
- 〈前置詞+〉 .....その名詞の前にくる前置詞(句) を記述
- 〈+前置詞〉 .....その名詞の後にくる前置詞(句) を記述

##### ■動詞見出し

- 〈副詞1〉 .....その動詞を修飾する副詞(語句) を記述

〈副詞 2〉 …down, in, off, on, out, up などその動詞と結びついて句動詞をなす一群の副詞を記述

〈+前置詞〉 ……その動詞と結びつく前置詞を記述

#### ■形容詞見出し

〈副詞〉 ……その形容詞を修飾する副詞を記述

〈+前置詞〉 ……その形容詞と結びつく前置詞を記述

#### ■統語的連結

〈+to do〉 〈+doing〉 ……その語が慣習的にとる構文を記述

〈+that 節〉 〈+wh.〉

〈+ -self〉 〈+補〉

#### ■その他

〈雑〉…上記のいずれの分類にも入らないが、その語にとって重要な表現などを収録

旧版との変更点は、新版の「まえがき」の中で次のように述べられている。

1958年の増補版で新設された名詞見出しの Q<sup>2</sup>（「名詞+名詞」を扱う項目）を Q（「形容詞+名詞」を扱う項目）と合体させて〈形容詞・名詞+〉としました。両者をはっきり区別することが無理な場合が多く、むしろ一緒にするほうがより実際的であろうという判断によるものです。その一方で、〈+to do〉 〈+that 節〉などの統語的結合を示す欄を新設しました。コロケーションと直接には関係ありませんが、英語を書く際には大いに参考になろうかと思います。

### (5) 勝俣とその信奉者達

本辞書の原版（1939年）について、勝俣自身が書いた文章がある。<sup>2)</sup> 著者の真意が示されており、貴重な文献になると思われるので、その儘引用しよう。（原文は縦組み）

#### 辞典の編纂に就いて

早稲田大学教授 勝 俣 銓 吉 郎

最近自分は辞典を公にした。その事を話す前に一言一般の辞典に就いて述べ



る。辞典は一国の文化の尺度であると云われているが実際辞書を見ればその国の文化の程度が解るのである。日本の辞書はまだ不完全なものでこの点英国が世界で第一位に居る。彼の N.E.D. は七十年の歳月を費して編纂されたもので実に天下の偉観である。

N.E.D. は十万の本から五百万のクォーティションを採集し、その中から二百万を選択整理したものである。辞引の進化から見れば第四期に属するものである。即ち、第一期は難語集の時代、第二期は全国語集の時代、第三期はジョンソンの辞書がその一例であるレーション即ち例証の時代、第四期はリチャードソンの辞書に見られるヒストリカルな時代である。このヒストリカルな段階に於て N.E.D. は最近の発展を示す向である。日本には歴史的な編纂の辞引はまだ出来ていないのでこの点英国に及ばないという訳である。辞書を語る場合 N.E.D. を顧みない訳にゆかないので一言これに及んだ次第である。

東洋は西洋を知るために英語、西洋は東洋を知るために日本語——東西の融和はこの言語的日英同盟に依って達成されるのである。西洋に日本語を普及させるのは今日の情勢では英語の教師の役目であるから、自分もこの方面に努力しようと意気込んでいる。自分は活用辞典の姉妹篇として日本語辞典を作ろうとして材料を集めている。

自分は新聞記者としてスタートを切ったものでいつも實際を重んじ大衆を相手にするという態度を持続して来た。今度の辞引も学者を喜ばすものではないかも知れないが、実用性の点に於ては相当の自信を持っている。ジャパントイムス社の4年間はどうかこうにか英語で自己表現が出来るように自分を仕込んでくれた。そのジャパントイムスは日本人が英語で世界に呼びかけた抑もの始めである。併し自分丈英文が書けるというのではその技術は自分一代で亡びてしまう。人も英文を書けるようにしなくては今日の日本では困る。そこで夙に辞書編纂の準備にかゝり、その間蓄積した材料を五年間に纏めたのが今回の活用辞典である。自分はノートブック・ハビットによって山なす材料を蒐集し得たのであるが、これを如何に分類するか問題だったのである。そこで「何をどうする」と云う collocation を中心にした。英語には英語の魂がありこの語魂が極めて切実にこの collocation に現われているからである。編輯するにつけては機材的要素が必要であるから十二万枚の原稿を作った。

自分の作った辞引は所謂 one man dictionary ではなく翻訳や校正に三人の手を借り、自分は原稿を一回、校正を二回見たのである。大学での教授の仕事が随



分重荷なのでそれだけでも仲々骨が折れたのであった。「活用辞典」はこの編纂法式に於て新機軸を出しているのであるから何れ海外学者の批判を仰ぎたいと思っている。兎に角国際的に使用される様な辞引を作ったということは自分として喜ばしき事である。自分の辞書が出版されたためいく分でも日本人の英作文が伸びることが出来れば多年の丹誠が無駄でなかったというものである。「活用辞典」が活用されたのである。

世に勝俣英語の信奉者 (followers) は多く、辞書の世界でもその後継者を以て自任する人は少なくない。一例を挙げると日本経済新聞社刊『**経済英語例文活用辞典**』(全371ページ, 1976年)の編者寺澤浩二氏である。同書の後身『**経済英語和英活用辞典**』<sup>3)</sup>の「序文」では勝俣との関係を次のように述べている。

今日、英語を書く仕事を続けられているのは、40数年前に勝俣先生の<sup>けいがい</sup>聲咳に接し<sup>(註)</sup>、コロケーションの重要さに目を開かれたお陰である。

(注) 著者は早稲田大学卒業

因みに、『**経済英語和英活用辞典**』の姉妹編である筆者編の『**経済英語英和活用辞典**』(後述)も、勝俣の英和活用辞典と同じ流れを行くものである。

## (6) 外国における出版物

勝俣と同様に連語関係 (collocation) を重視した辞書に、下記の米国の出版物がある。

—— Morton Benson, Evelyn Benson, and Robert Ilson, *The BBI Combinatory Dictionary of English, A Guide to Word Combinations*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia, 286 pages, 1986.

本書の裏表紙で、本書の特徴として、The BBI COMBINATORY DIC-

TIONARY OF ENGLISH tells you which words go together in English and which words do not.と、The BBI will help you master the difficulties of common but unpredictable English phrases and word combinations.の2点を謳っている。

本書の日本販売元丸善から出された「解説と使用手引」(書中折込みパンフ<sup>4)</sup>)の中で、寺澤芳雄氏は次のように解説している。

言語の運用における〈連語〉の重要性が認識されると共に、一般の学習英語辞典でも、H.E. Palmer の遺鉢をつぐ A.S. Hornby 編 *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (1948, 1974<sup>3</sup>) や *Longman Dictionary of Contemporary English* (1978) などで連語の記述が重視され、また各種の学習英和辞典も編集の特色の一つとして連語の扱いを競うようになってきた。これに対して、とくに連語に視座をおいて編集した英語辞典としては、国内では勝俣銓吉郎編『新英和活用大辞典』(*Kenkyusha's New Dictionary of English Collocations*, 1958) がよく知られており、海外には J.I. Rodale 編 *The Word Finder* (1947) や Albrecht Reum 編 *A Dictionary of English Style* (1955) などがあって、それぞれすぐれた特色をもつ反面、後でふれるような限界が指摘されている。

参考までに discuss と discussion の例を下に挙げたが、基本的表現も十分カバーしているとは言えず、また英語を外国語として (EFL=English as a Foreign Language) あるいは第二国語として (ESL=English as a Second Language) 学ぶ英語学習者にとって必ずしも親切なものにはなっていない。勝俣の価値が改めて脚光を浴びるのである。

**discuss** *v.* 1. (D ; tr.) to ~ with (to ~ smt. with smb.) 2. (Q) we ~ ed how we would do it

**discussion** *n.* 1. to arouse, provoke, stir up (a) ~ 2. to have ; lead a ~ 3. to bring smt. up for ~ ; to come up for ~ 4. an animated, brisk, heated, lively, spirited ; brief ; candid, frank, open ; lengthy ; peaceful, quiet ; serious ~ 5.

a group; panel; round-table ~ (to lead a panel ~) 6. a ~ about, of 7. under ~ (their case is now under ~)

なお、本書には翻訳版の『BBI 英和連語活用辞典』<sup>5)</sup>も出ている。三人の著者はオランダ人（石山輝夫氏）<sup>6)</sup>の由で、BBIは著者名の頭文字からとっているようである。

今日、英語辞書は言語コーパス (corpus) 蓄積の時代に入っており、その第1号が Collins COBUILD English Dictionary の初版 (1987年) であり、約10万の用例を擁していた。その用例を全面的に入れ替えた改訂新版 (コウビルド英英辞典) が早くも1995年世に出た。

COBUILD は、COLLINS Birmingham University International Language Database の頭文字で、1987年に初版が出版されるまでに2000万語のコーパスを作成し、改訂新版が出版される時には2億語のデータベースを持つにまで至っており、コーパスの名称を The Bank of English と名付けている。<sup>7)</sup>なお、このデータベースは Internet などアクセス可能となっている。

見出し語は7万5000以上となっているが、ここでも discuss を例にとって、内容を調べて見よう。

#### **discuss/disk\_AS/discusses, discussing, discussed**

1 If people **discuss** something, they talk about it, often in order to reach a decision. *I will be discussing the situation with colleagues tomorrow... The cabinet met today to discuss how to respond to the ultimatum.*

2 If you **discuss** something, you write or talk about it in detail. *I will discuss the role of diet in cancer prevention in Chapter 7... Coming up after the news, Dan Schorr discusses the state of the presidential campaign.*

例文で語義までも説明してしまおうという試みは面白いのだが、紙幅の制約のためか collocation の説明としては不十分なものに終わっているのが、不思議である。やはり、一石二鳥は無理ということであろう。

COBUILD の簡約版とも言える John Sinclair, et al., *Collins Today's English Dictionary*, Harper Collins, 1995においても、その傾向は変わっていない。

**discuss** (discusses, discussing, discussed; discussion) When people **discuss** things, they talk about them seriously. Talking seriously about things is called **discussion**; a **discussion** is a serious conversation. If something is *under discussion*, it is being talked about and no decision has yet been made.  
◇ A **discussion** is also a serious piece of writing in which the writer examines a subject in detail and expresses opinions about it.

## 2 羽田三郎編『英和貿易産業辞典』とその流れ

——羽田三郎編「英和貿易産業辞典」全1181ページ，うち本文1041ページ，改訂新版，1970年（英文名：Kenkyusha's English-Japanese Dictionary of Trade and Industry）

### (1) 前身の『英和商業経済辞典』

——中嶋鍬造・藤田仁太郎共編，研究社『英和商業経済辞典』全1122ページ，本文は補遺を含め946ページ，研究社，1933年。

戦前1933（昭和8）年の刊であるが，手許にあるのは古書として注文したものである。

この戦前版自体が本文946ページとかなりの分量であり，当時としては充実した著作であったことを窺せる。原版の「序」から本書が編者中嶋鍬造氏が刊行途上での病死により藤田仁太郎氏との共編となった経緯が明らかにされている。

### (2) 藤田仁太郎編『英和貿易産業辞典』研究社，1955年

羽田三郎編，同書改訂新版（1970）では，その「改訂の弁」の中で，次の

ように述べ、同書の真の前身は『英和商業経済辞典』（1933）ではなくて、後日出版の『英和商工辞典』（1941）であることを明らかにしている。

原編者は「英和商工辞典」（初版昭和16年）以来、戦中・戦後を通じてたゆまず研究され、「英和貿易産業辞典」（昭和30年）となってからも、2年後には改訂増補され、さらに改訂への研鑽（さん）をつづけておられたが、昭和35年9月23日、74才を以て逝去せられた。その後、新しい事物の発生はもとより、国語改革の影響もあり、原版も傷んで、絶版の状態であった。

この経緯は、改訂新版に収録されている「旧版序文」と「昭和32年度の改訂版に際して」の編者の言葉からも明らかである。

『英和貿易産業辞典』が出来までの経過については、編者自身の説明がある<sup>8)</sup>ので、以下にその主要部分を再録する。

英和貿易産業辞典が出来まで

辞書の編纂を終えて

藤 田 仁 太 郎

（前略）

三菱（注．三菱商事）に這入ってからの私の仕事は先づ濠洲との輸出入の実務と英米向商用文の英訳とであったが後年独文機械類仕様書の英訳と英文電報コード（private cable code）の編纂とが加わった。当時の生活としては時折顧問の英人から「この訳文には grammatical mistake はないが英国人はこんな expression は用いない」とか、「君の英語は school English だ、Queen's English には今一息だ」と云ったような批評を頂戴した想出が残っている。それで英米語の good usage を習得するため英米商社との往復文書を繰返し閲読したり、ABC Code や Western Union Code などから慣用語句の抜萃をしたり、手当次第英米の trade journals の渉り読みをしたものである。

それらの雑誌の中でも London Times の Weekly Supplement of Trade and Industry（後に Trade and Engineering と改称）はその文体の平易暢達で記事の多種多方面に亘っているのとで、私の愛読誌の一つであった。そうしているうちに私は我国の英語教育の text が大部分数世紀前に書かれた所謂英文学中の作品から採用せられている半面、現代の実用英語が非常に軽視せられていることに気

付いた。これは中国の時文をさし措いて漢文の読解を偏重したのと同様の弊風である。商工立国を国是とする我国では斯様な弊風を打破することは極めて肝要なことであり、このために若い学徒に容易に欧米の trade journals を読破し得るような趣向の辞書の編纂が極めて必要であると痛感するようになった。これが私が Business English 関係の辞書の編纂を私の life work に撰んだ最大の理由である。

その後三菱奉仕十年の生活に終止符を打って英国大使館の商務官室に移ったが、そこでは一層豊富な資料の蒐集と疑義の解明に多大の便宜を得たので、愈々

念願の辞書の編輯に取掛かった。斯くて在職十四年間に出したものが英和商業経済辞典と英和商工辞典の二冊である。前者は編纂中途に病没せられた故中嶋鋳造氏の遺稿をそのまま整理増補したものであり、後者が私本来の構想になったものであるが出版間もなく太平洋戦になったので、戦時中却って米国で写真出版せられていたのを戦後再び増補改版して今日に至った。今回出した英和貿易産業辞典は元東京日々（東京日日新聞）の社会部長で終戦後追放になっていた郷友堤為章君の依頼により、我が国貿易振興の一助たることを主眼として昭和二十三年に始められたものである。

いうまでもなく辞書の編纂には長い間に亘って種々な方面から多数の vocabulary を集めこれに説明を加え、傍ら目にとまった適切な例文を配して稿を伸ばして行くのであるが、この単純な process の中でも多少の難題が伴ってくる。その第一は私自身工業技術の素養に欠けているため、種々の機械やその部分の structure, working, performance などの説明が不十分な場合もあり、又不能な場合もあった。これらの欠陥については此の辞典の使命が貿易取引を便ならしめるにあることに鑑み読者諸彦の御諒察をお願いしたいと辞書の巻頭に記した通りである。

次ぎの難問は英語米語間に相当多数の意義や用法の相違が存することである。例えば F.O.B.用法の英米における相違や、F.P.A.A.C.と F.P.A.E.C.との相違などは一般に知られているが、同じく F.O.B.や C.I.F.にしても1919年の India House Rules や1936年に Warsaw-Oxford Rules を改訂した Inco Terms によって国際的には一般的規定が出来ていても、その細則に至っては各国で多少の相違がある。卑近なところでは英国では会社を company 米国では corporation といっているかと思えば米国にも Ford Motor Company があり、Anaconda Copper Company があり、英国で商店を shop 米国で store といふかと思えば倫敦に Harrods, Selfridges, Bakers 等の department stores がある。英国で経営経済を



business economics, 米国で business administration というのだと思っていると、米国商務省に Bureau of Business Economics と称する一局があり、英国では罐詰を tinned goods と云い、米国では canned goods と呼んでいるかと思えば英国の貿易年表には矢張り canned goods と載っている。その他類似の相違が随処に出て来るが、而もこれらは Modern English Usage にも Modern American Usage などにもその説明は見当らぬ。斯様な用語術語の相違は我国としても特に商業貿易の方面に於て今後相当な研究を必要とする問題ではなからうか。

第三には訳語そのものの適不適の問題がある。例えば ultranationalism は邦語では一般に超国家主義と訳されている様であるが、超国家主義は実は internationalism と同様の内容を持つので、ultranationalism は極端な国家主義と訳すべきものではあるまいか。又 employment は多少封建的ニウアンスを有する雇用という訳語で使われているが、unemployment が失業と訳される以上これと対応して就業と訳するのが適當ではあるまいか。又多角経営を diversified management と訳した某紙を英商務官に示したら解からぬと云われたので、multiple operation (of an enterprise) に書換えたら、それなら解ると云われた。これとは逆に邦語英訳の適否という問題もある。例えば財政投資というのは我国予算関係の通語である。これを financial investment と訳してもそんな term は英米の著書には見当らぬ。某誌はこれを state fund investment と書いているが、当の大蔵省では government investment が適訳だという。又揚超というのも我国財界の通語である。これを某紙では excess withdrawal (of the designated deposits) と訳しているが、英国大使館あたりでは over contraction (of currency) だといっている。以上の外訳語の不適切なもの、まぎらわしいものなどまだざらにある。訳語の統一ということも現今我が業界にとっては極めて必要な問題の一つではなからうか。

最後に国内規定、国際協定などの改廃の問題がある。例えば1950年12月に出来た International Materials Conference を本文中に入れて、附録中に協定各品目の明細を表示しようと思って日本商工会議所で調べて貰ったところ既に昨年秋までに全部の品目の協定が廃棄になっているとのことであった。又最近我国が技術援助の面で新たに Colombo Plan に参加を認められたことなども本辞書への採録には最早や after the fair の恨事であるがこれらの点に就いては編者としては再版の増補に際して善処する予定である。(以下略)

(上智大学教授)



### (3) 羽田三郎編、改訂新版の特徴

まず、同書「改訂の弁」の抜粋（下記）によって改訂新版発行に至る経緯を見てみよう。

#### 改 訂 の 弁

この辞典は藤田仁太郎編「研究社英和貿易産業辞典」を全面的に改訂した新版である。

改訂の要点は後で別項に示すことにして、ここには、この辞典の性格、生い立ちなどを書いておきたい。本書は名称の示すとおり、貿易を中心とする商業・経済・経営から機械・電気・建築・船舶・化学など広汎な産業におよび、この新版では情報化時代に応ずるため電算機関係の語も及ぶ限り収容した。

英和对訳のみならず、必要に応じて内容も解説し、活用語法なども示す特殊辞典である。

直接国際的取引のある業種・職種はもとより、およそあらゆる産業に従事する者および学習者にとって、英語の必要はますます高まり、一般辞書においても現実的必要に考慮が払われるようになっては来たが、実務家および実務を志す人に、端的に役立つ必須用語に詳しい専門辞典があつてよいはずである。

原編者は「英和商工辞典」（初版昭和16年）以来、戦中・戦後を通じてたゆまず研究され、「英和貿易産業辞典」（昭和30年）となつてからも、2年後には改訂増補され、さらに改訂への研鑽（さん）をつづけておられたが、昭和35年9月23日、74才を以て逝去せられた。その後、新しい事物の発生はもとより、国語改革の影響もあり、原版も傷んで、絶版の状態であつた。

一方、この辞典に対する問合わせは絶え間なくあつた由で、遂に出版社かは私のところへ改訂の依頼があつた。私はその任に非ずと再三固辞したが、他に引受け手なきまま、せっかくの名著が絶えてしまうのは惜しいと思い、非力をもかえりみず、お引受けした。

さて、改訂は創作よりむずかしい。「疑わしきは罰せず」か、「疑わしきは削る」か？ 後者の方針であつたが、実を言うと、改訂者自身この仕事にかかる前は、他の辞書にないものをこの辞典で発見することしばしばであつた。他に拠り所なきとき、旧版に相当の根拠ありと察せられるものは、削るにしのびなかった。

ともあれ約3年山なすカードと取組み、今面目一新した校正刷を前にして、こ

の改訂の機会を与えられたことを感謝する気持ち一杯である。原編者藤田先生のご冥福を祈ると共に、非力のゆえに改訂が改悪になっていないかと恐れる。利用者各位のご叱正を待って改めて行くつもりである。(以下略)

昭和44年10月

改訂者 羽 田 三 郎

本辞典の特色として、同書カバー裏に次の諸点を挙げている。

### **本辞典の特色**

#### **□貿易用語と背景知識の結びつき**

貿易用語はもちろん、銀行、保険、海運などの用語、それらの背景となる法規、慣習の定義と解説は懇切でしかも簡明、各種検定試験にも便利です。

#### **□セールズとエンジニアリング**

商品はますます高度化し、セールズとエンジニアリングの結びつきが必要ですから、貿易・商業上の用語と共に電気・電子・機械・建築・化学などの理工系の術語を豊富に採録しました。

#### **□情報化時代に備えた用語と解説**

コンピューターや経営情報システム関係も基本的な語を収めました。

#### **□実際に使える最新の訳語**

実務家がそのまま実地に使えるように、最も新しく、しかも慣用に合う訳語が与えてあります。

#### **□読むだけでなく、表現力への配慮**

▽印のところに活用語法を、また◇印では商用文から採った例文を示し、その他各所に語の使いかたを示す工夫がこらされています。

#### **□貴重な資料の充実した付録**

実務に必要な国際法規慣習、電報とテレックスの文法など、いろいろ貴重な資料が巻末にまとめてあります。

#### **□忙しい人が使いやすい辞典**

8ポイント活字でゆったり組み、さらに、あちこち参照の手間を省くため、記述の重複もいとわず、忙しい人に引きやすくしました。

同改訂新版に収録の「改訂の要点」の中で、「この辞書の見出し語は約11,600語と一見少ないが、術語の多くは複合語を成し、見出しの中の術語は約52,700語と膨大な数に上り、一つ一つたしかめる手数は大へんなものであった」とあり、この辞典の特徴として、複合語の術語（専門語；technical terms）を多く収録していることを示している。

また、配語法（collocation）について、下記の説明がなされている。これも一つの特徴点である。

配語法・成句・活用語法など名称はともかく、例えば market という名詞を中心として、それと共に用いられる形容詞・動詞・前置詞などを知らなければ活用できない。読むだけでなく、書き話すための配慮をした。

今回改訂の一大要目は▽印をつけたところに活用辞典のような collocation を示したことである。また語義を示すついでに用法を付記したことも多い。例：**inform** *v.t.* 通知する（a person of a fact, that...）；吹き込む（with）... *v.i.* 密告〔告発〕する（against）。

#### (4) 羽田辞典の流れにあるもの

——橋本修編著『新商業貿易英和和英辞典』全702ページ，同文館，1977年。（英文名：*New Business & Foreign Trade Terms English-Japanese Japanese-English Dictionary*）

以下、本書の「序」（一部省略）を見てみよう。

#### 序

わが国は、資源に乏しく、貿易立国を国是とし、原材料を海外より輸入し、それを製造品として輸出し、一億民生の安定を図ることを国策としている。

これがためには、貿易業遂行上多くの手段を必要とするが、そのうち特に重要なものは商業英語通信文 Business English Correspondence である。商業英語通信文には商業英語の活用を必須とするが、不幸にして目下参考とすべき商業英語辞典が誠に乏しい。この必要を充たさんがために、私が敢えて「商業英語辞典」の編著の企画を立てたのは約20余年前のことであった。私は大学教授を本務とす

るもので、多忙な日常生活の間に余暇を作っては、拮据この「商業英語辞典」の編著に努めた。日夜これに没頭し、精魂を傾けて、数万枚の原稿を書いたので、疲労の極ついに病魔におかされ数度入院し、生死の間を彷徨したこともあったが、幸にして日赤の名医花岡正儀先生に廻り逢い、今でも御懇意に願っているが、先生の献身的な御努力のお蔭で恢復させて頂いたのは衷心感謝の至りであり、幾ら感謝しても感謝し切れないものがある。かくして病後私はまたも筆を執り、努力の幾年かが続いた。しかし余りにも膨大な量となったので、出版書肆は経費の関係上縮小を希望して来た。折角精魂を傾けて書いたものではあり、一方当初の所期の目的を逸脱する恐れもあることは遺憾ではあったが、少しでも早く世に出した方がよいと考え、涙を呑み、英断を以て一部の原稿を割愛することにした。

私は Business English の研究に携わっており、今や50余年になる。従って本辞典は、私の Business English 研究50年の記念搭ともする意図のもとに、敢然勇気を振起して原稿の執筆を継続した。苦しいこと、辛かったことの数々の思い出がある。例えば、寒夜就眠中にふと良案が頭に浮ぶと、俄然跳起きて机に向ったことも幾度となくあった。こんなとき、書斎の窓ガラス越しに見た夜明けの空には、暁の明星が淋しく輝いていたり、また弦月が今や西に沈まんとし、犬の遠吠が遙かに聴えて、霜結ぶ冷たい夜明けの寂寥をしみじみと味わったりした記憶が甦って来る。一方、おこがましいが、この小著が殆んど私の独力のみによって完成へと進み得たのは、永年に亘る家族や友人の鞭撻と激励の賜であって、本辞典は、世間でよく耳にするような、いわゆる多くのスタッフによって「編集された辞典」ではなく、私の過去に於ける貿易実務上の経験に基づいた研究精進の果実であり、又著作物でもある。従って、その間に博士論文執筆のヒントを掴んだり、またその資料の一部をも得たことは、その何よりの証拠といえよう。唯、膨大な量の校正には苦心惨憺し、数年を費してできるだけその整理訂正に努力したが、万一誤りがまだ残って居ればそれは後の機会に訂正する念願であるが、一方知友等の間から「辞典はまだか」と、しばしば催促されるし、このささやかな業績が多少にても貿易業界、学界、一般の人々や、学生諸君の参考書ともなり、また座右の友ともなり、わが国の貿易業務遂行上に聊かにても貢献する処があれば、私の願望は達せられたのである。(以下略)

昭和52年孟春 伊豆・清風荘にて

橋 本 修

明治28 (1895) 年生れの著者が、1977年、齢82歳にして完成させた辞典である。複合語の網羅性、重厚な解説において優れており、何よりもこの著書を殆んど独力で完成させたという辺りが、制作者の立場にある筆者を惹きつける。

高齢での著述であり、世にアピールする点がやや乏しかったのが惜しまれる。もっと評価されていていい業績であろう。

——林暁雄, 他編『現代ビジネス英和辞典』本文1370ページ, 開拓社, 1986年。(英文名: *The English-Japanese Dictionary for Contemporary Business Communication*)

本辞典の「まえがき」から、対象領域と制作の過程について言及している箇所を、以下に引用する。

国際商取引全般に関連する学問領域として経済学、商学(マーケティングを含む)、経営学、産業科学などがあげられます。さらに、国際間の経済交渉も単に商品およびサービスの取引のみならず、資本・労働といった生産関係の交渉にまで発展していることに鑑み、法律の領域(国際私法・英米法・商法・民法その他、慣習)の用語も必要な限り収録に努めました。特に、貿易に密接に関係する運輸、保険、商品などの取扱いを含む貿易商務に欠かせない語句を主要収録対象としました。国際商取引は商品およびサービスの双方を含み、商品の取引は大別して、食糧群、原料群、そして製品群であります。製品群として、重機械・軽機械などの機械類、化学品、窯業品、軽工業品、雑貨、食料品、繊維製品などの用語を必要とします。そのうち、コンピュータ類、すなわち、電子機器など、およびそれに関する用語は、情報の分野に属するとして『情』のラベルを付しました。製品の場合、輸出入品目統計表および関税率表に記載されているものを中心として、物品の生産・流通・分配・消費の過程における諸分野の関連語句もできる限り多く収録に努めました。また、海上・航空の運輸サービスや、海上・航空貨物保険サービスも取引に伴います。すなわち、商品を目に見える貿易(visible trade)とすれば、これら目に見えない貿易(invisible trade)であるサービスの取引に

関する用語の収録も行ったことは、いうまでもありません。

敢えて次のことを付言しておきます。小見出し語句の大部分は、ビジネス業界諸分野で刊行されておりました専門雑誌などから単語や連語として永年にわたって収集していたものを一枚ずつのカードに記入し、それらを主として英米において既に出版されている一般の英語辞典および専門分野の辞典から検出すべく努めました。ある語句はまだ一般の辞典に用語として定着していないものもありました。また、国内外の辞典に埋もれていた用語（特にビジネスに必要と思われるもの）を掘り起こして光を当てるため、それらは本辞典では小見出し語群の重要な部分を占め、先人たちの偉業より多大の恩恵に浴しております。なお、平易な語句は割愛しました。

この辞典は、複合語についてより網羅的でかつ現代的であり、その点で引き続き広く利用されるであろう。

——海野文男・海野和子編『最新ビジネス・技術実用英語辞典 英和・和英』

英和の部792ページ，和英の部659ページ，日外アソシエーツ，1994年。

（英文名：表示なし）

本辞典の帯紙に、次のような表示がある。

#### 実務翻訳に必携の用例集

この辞典は、用例を集めてアルファベット順と五十音順に並べたもので、いわば用例集です。用例は、実務和英翻訳に携わる私達二人が既存の辞典に無い有用な表現を拾い集めたものがベースになっており、それに基本的な表現も加えてあります。

（「はじめに」より）

70,000件の豊富な用例

（注）「はじめに」のこの辞典の特徴の(4)「同じ用例が英和からも和英からも直接引ける」の中で、用例数は、英和、和英の部でそれぞれ3万5千ほどです。大半の用例は、英和と和英で重複していますので、ご了承ください、とある。



#### 特長

- 英和13,000語、和英12,000語の見出し語を収録。
- コンピュータ・ハイテク分野のテクニカル・タームやビジネス用語の翻訳にぴったりの英語表現を満載。
- 用例はすべて実際に使われている自然な英語から取材。
- 特殊な専門用語だけでなく、それらをつなぐ一般的な動詞を重視。

海野夫妻によるこの用例集は、実務和英翻訳に携わる二人の共作で、コロケーション、可算、不可算（名詞）などの実例文集めを仕事の合間に進めたもの。11年がかりの用例収集と4年がかりのデータ整理（コンピュータ編集）の成果で、その間の生活のための資金借入れなどの苦労話も「はじめに」「謝辞」に述べられている。

また、マスコミに採り上げられ、漸く出版に漕ぎつけた経緯などは、制作者側に立つ著者としても心情的に十分理解できる。

本書の特徴の一つとして、編者は「特殊な専門用語よりもそれらをつなぐ一般的な動詞が中心」になっていることを挙げている。専門用語辞典として、また勝俣の流れを行く活用辞典として、本書の価値は大いに評価されるであろう。

### 3 橋本光憲編『経済英語英和活用辞典』

——橋本光憲編『経済英語英和活用辞典』全867ページ、日本経済新聞社、1991年。（英文名：A Dictionary of English Usage for Business and Finance）

前掲の寺澤浩二編『経済英語和英活用辞典』（1985）の姉妹編である。出版の経緯や内容説明については「まえがき」に詳しいので、まずそれを見て頂こう。



## まえがき

辞書は大小取り混ぜ、さまざまのものが世に出ているが、それぞれにその役割を異にしている。英和辞典もまたその例に洩れないが、日本経済が国際化する中であって、まだ比較的少ないのが経済英語辞典であろう。その中でも、単語・熟語の説明にとどまらず、実際に活用できる例文を数多く収録しているものは、ほとんどないと言ってよい。

日本経済新聞社では、すでに和英の分野で『経済英語和英活用辞典』（寺澤浩二編）を発行しており、英米の新聞雑誌等から採取した用例を示して、経済英語を書く人に活用されている。

約3年前、同社から姉妹篇の英和辞典執筆の要請があり、今日完成を見るに至った本書は、表題の英和辞典という性格からも明らかなように、経済英語を読む人のために役立つことを主な目的としている。

では、この辞典にはどのような特徴があるだろうか。当然のことながら、第一には経済英語を読む人のために、経済の諸分野の基本語・専門語を極力幅広く収録したことである。その数は約5300語。その点では、本辞典一冊で、大辞典や専門辞典、新語辞典に当たらなくても、たいいていの場合に間に合うはずである。したがって、皆さんにはそれぞれの専攻分野の資料に加えて、本書の備え付けをぜひおすすめしたいと思う。

第二の特徴は、本書に収録した、活用辞典の所以である約2万3000の用例である。その基本をなすものは、編者が以前から収集してきた商業・金融関係の約1万にのぼる用例で、今回これを見直して使用した。業務の場面で実際に使われていたこれらの模範的な文例は、経済関係の文献を読みこなそうとする人の参考になることはもちろん、さらに進んで自らの作文に活用しようとする人に役立てられよう。

本書は英和辞典ではあるが、用例のみならず、全体が英作文辞典としての機能をも持たせるよう配慮したことが、編者としては特に強調したい第三の特徴である。詳細は別項の「本書の使い方」に譲るが、重要語の用法、熟語などの成句、名詞の単数・複数の使い分け、冠詞の付け方などに、特に注意を払って書いてあり、また、手紙の例文も数多く入っている。ある英語の単語（たとえば business）を思いついて、本辞典を引けば、さまざまな参考文例が得られる。

本辞典は、英語のアルファベット（ABC）順で単語を配列してある。そして、それぞれの項目の中で、熟語・成句・例文などを、すべて和訳付きで挙げてある。用例が多いのは、名詞と動詞である。名詞の用例は、名詞を取る動詞、名詞

を修飾する形容詞，名詞が取る前置詞の順で並べてある。動詞の場合は，動詞を修飾する副詞，動詞が取る前置詞，その他である。この特徴を十分理解した上でこの辞書を引いて戴けば，一層便利に御利用になれるはずである。

編者はこれまで何点かの著述を世に送ってきたが，本書との関わり合いは最も長く，銀行本部勤務時代に収集した約2000の文例が始まりである。その後，そのカード化や金融・経済関係の例文採集をさらに進め，業務の合間を縫って，文例約7000の一応の辞典草稿をまとめた上で，最近数年間は，米大学院受講や大学教員転出準備の過程で，経済学文献や経営関係資料を当たりながら，内容の充実を図ってきた経緯がある。

辞書のような著作物は，もとより既刊の内外の辞典や文献の恩恵を受けてできるものである。本書もその例外ではなく，いちいち名前は挙げないが，その学恩に謝意を表する次第である。

また，共に困難な編集作業にあたっていたいただいた日本経済新聞社出版局編集部の増山修氏に厚くお礼申し上げたい。

読者の皆さんが，「活用辞典」の名にふさわしく，本書を十分に活用して下さることを心から期待している。

1991年 6 月

橋 本 光 憲

因みに，「帯紙」では次のように謳っている。

基本語5300/用例23000!!  
生きた経済英語〈実例〉の宝庫

○主な特色○

- 基本語から専門語まで2万8000余を収録。
- すべてビジネス・ファイナンスの現場より採集。
- 重要語句には注釈を加え，専門用語には分野を明示。
- 前置詞，修飾語などの連語関係（コロケーション）を説明。

○手紙文の用例を幅広く取り入れ、英作文辞典としても便利。

「辞書作り」という特殊な作業を明かす意味で、制作の過程を少し説明しておこう。それは、出版社あてに提案する以前にどのように材料を蓄積してきたかという事実である。それには勿論、そういった必要を感じ、仕事を始める動機やきっかけがある。その点は、前掲の「はじめに」で、その背景を説明してあるので、参照いただきたい。

今回の経済英語英和活用辞典のベースになる橋本編『銀行英語辞典』（未定稿）の内容説明。

#### 全体の分量

B 4 判集計用紙50枚綴で37冊、約1,850枚。行数は1ページ平均15行で、総計約28,000行。

経済英語辞典 (Dictionary of Business & Economic Terms) と言うためには、Economic Terms (含文例) を多少補強する必要がある。

#### 【参考】 橋本編「銀行英語辞典」作成の過程

##### ① S37～38年 「銀行英語文例抜萃」(A 4 判100枚)

S31年9月より約5年半の外国部渉外課在勤中に、主に英米銀行の通信文や資料から文例を採録したもの(文例は約2000例)。

##### ② S42年 「銀行英語文例カード」(細長カード2400枚)

第①項の文例抜萃をカード化し、見出し語順に文例カードとすると共に、手紙のパターン、数の表現の仕方などを分類整理した。

手紙のパターンは、日経文庫『銀行英語の手ほどき』で使用。

##### ③ S50年9月 「銀行英語文例索引 A～Z」(図書館用カード3400枚)

アメリカの金融関係文献を集めて文例を拾い上げ、当初文例のカバー不足分を埋め、図書館用カードに記録化することによって大体の骨組みが出来上がった。

##### ④ S51～52年 「銀行英語辞典原稿」(B 4 判1850枚)

前記図書館用カードを暇を見ては原稿にし(B 4 判集計用紙1冊50枚×6行)、一般英語辞典や経済辞典と対照しながら執筆を進め、集計用紙37冊の未

完成稿ではあるが、一応の完成を見たもの。

基本語句（第1次作業……S52年終了）

見出し語	約2500	うち重要語	150
複合語・熟語	約	210	
例文・慣用句	7542		
うち例文	約4500		
慣用句	約3000		

⑤ S53～62年「英和金融用語集」（小型カード3600枚）

第④項の追録のため、英米金融関係文献から用語例を収集し、「銀行英語辞典原稿」を追補（3分の1強を終了）。

⑥ S53～62年「和英金融用語集」（B 4判900枚）

「金融実務用語集」（和英）5500語、「和英金融用語集」（前記の追録）2500語、合計8000語。専門用語は更に要検討。

⑦ S55～59年「英文銀行用語集」（B 4判470枚）

金融英語を業務分野別（46部門）に再整理し、その5分の1を前掲『銀行英語の手ほどき』「部門別用語ガイド」として発表した。

全体語句（第2次作業……追加1/3完了）

見出し語（+70%）	約	4000
複合語・熟語（+20%）	250	
例文・慣用句（+75%）	約13000	
うち例文	約	8000
慣用句	約	5000

未記入の追加用カード約2400枚を使って作業を進める。

〔付〕 和英面からの補強作業

英語辞典として作成して行く過程で、専門術語や日本特有の事象について不足が生じるもので、これを和英面から補強する必要がある。その材料は次の通り。

① 橋本編「金融実務用語集」（和英）未定稿

B 4判集計用紙50枚綴で11冊 約 550枚

1 ページ平均 10語 約 5500語

② 橋本編「和英銀行用語集」（同上の追録）未定稿

B 4判集計用紙50枚綴で7冊 約 350枚

1 ページ平均 7語 約 2500語

合計 約 8000語

総計 約13500語

英和編の見出し語、複合語の補強用として、英→和で使用。

実際の作業がこの通り進んだ訳ではないが、当初完成予定が昭和65(1990)年4月であったものが1991年6月刊行となったことは、辞書の出版としては順調だったと言えよう。

使用した参考文献は外国のものを含めて辞典の末尾に示してある。95年9月で3刷となったことは、出版としてもまずは成功の部類に入るだろう。

#### 4 東洋経済『経済用語和英辞典』に始まる専門辞典

——東洋経済新報社英文部編『経済用語和英辞典』本文671ページ，東洋経済新報社，1949年。(英文名：The Oriental Economist's Japanese-English Dictionary of Economic Terms)

##### (1) 『経済用語和英辞典』の先駆者

終戦(1945年)から占領軍，SCAP(連合軍総司令官)や民間貿易再開に至る過程で，必要に迫られて下記のような用語集が編まれた。

——大蔵省渉外部『英訳財政経済用語集』本文301ページ，大蔵財務協会，1948年。(英文名：A Glossary of Economic and Financial Terms)

——大蔵省財務官室『和英財政経済用語集』全402ページ，弘進社，1951年。(英文名：Japanese-English Economic and Financial Glossary)

##### (2) 『経済用語和英辞典』

敗戦後，英語で仕事をする人達の殆どがお世話になったであろう専門用語辞典が本書である。以下に「はしがき」を再録する。

#### は し が き

本辞典は，わが国唯一の英文経済雑誌“The Oriental Economist”の編集同人が，多年に亘る研鑽の結果として漸く生れ出たものである。弊社が，週刊東洋経済新報の姉妹誌としてわが国政治経済の実情を海外に紹介するため英文経済誌を創刊したのは昭和9年5月であった。併しこの仕事にとりかゝると，予想外の

困難に絶えず悩まされた。わが国で使用される財政・金融・貿易・海運・商品・市場・経済統制・経済法令・経済団体・諸官庁・生産技術その他経済百般に亘る用語を、適切な英語に翻訳することに多大の努力を必要としたからである。普通の用語の和英辞典は数多い。専門用語辞典も決して少くはない。併しいずれもわが国の複雑かつ変化極りない経済情勢を英訳する役には立たぬ場合が多かった。いきおいわが英文部員は、みずからこれら専門用語の適訳語彙を編み、これを積み重ねて、自己の用を弁ずるほかなかった。

これらの語彙の集積は終戦前すでに、裕に一本を成すに足り、折をみてこれを出版する計画であった。かゝる際たまたま終戦にあい、渉外事務は繁忙を極め、各方面からこの種辞典の出現が要望される情勢となった。こゝにおいて弊社は計画を急遽実現に移して遂に本辞典の刊行を見るに至ったのである。

本辞典に採録する語数は総計3万2千である。特に編纂開始以来3カ年を費して終戦後の新語を網羅することにも最善を尽した。固より今後専門家の叱正を得て増補改訂を要する点多々あるであろう。併し現在においては、実務家にとって期待し得る最良の和英辞典たるものと信じて疑わない。

なお、週刊“*The Oriental Economist*”の編集に忙殺されながら直接本辞典の編纂に精進されたわが社英文部員玉井孝一、大瀧守雄、吉澤孫兵衛、北村桂子、内間安太郎、川島東策の6氏および社外からこれに御協力下さった藤田仁太郎、勝守陸太郎、塩崎観三の3氏には心から謝意を表したい。

昭和24年6月

東洋経済新報社

編集局長 綿 野 脩 三

本辞典は、その後何回か改訂が行われている。すなわち、昭和38年7月にオリエンタル・エコノミスト編として第1版第1刷、昭和40年3月に改訂版第1刷、昭和45年5月に新訂版第1刷が発行された。

さらに、昭和52(1977)年3月に全面改訂を行った新版として、『新経済用語和英辞典』(英文名：*New Japanese English Dictionary of Economic Terms*)、本文501ページ、付録79ページ、が従来よりやや大型版化して発行された。



同辞典は、1995年4月、面目を一新して、『**経済産業用語和英辞典**』（全728ページ）（英文名：*Economic/Industrial Terms Japanese-English*）として刊行されている。「各産業分野の専門用語を網羅，収録語数65,000語，類のない初の翻訳者必携和英辞典」と謳っている。

### (3) 『**経済用語和英辞典**』の流れを行くもの

東洋経済の『**経済用語辞典**』の流れを行くものは少なくないが，共通して言えることは「用語辞典」の枠を守り，羽田『**英和貿易産業辞典**』の系統とはやや異なって，熟語や連語関係などの活用語法の側面に余りウエイトを置かない傾向が見受けられる。

それは，辞典としての一種の「棲み分け」といってもいいかも知れない。

——編集代表小林寿夫『**現代ビジネス英語大辞典**』パシフィックマネジメントコンサルタンツ，1974年。（英文名：*Modern Business English Dictionary*）

専門用語を和英・英和の形式で約6万語収録。この系統のものに下記がある。

——編集代表小林寿夫『**現代和英英和会計・税務・法律用語辞典**』パシフィックマネジメントコンサルタンツ，1974年。（英文名：*Modern Accounting, Tax & Law English Dictionary, Japanese-English/English-Japanese*）

専門用語を和英・英和で約2万5000語収録。さらに「企業会計原則」「英文財務諸表の作り方」について説明。

——編集代表小林寿夫『**英和・和英新ビジネス英語大辞典**』本文2064ページ，パシフィックマネジメントコンサルタンツ，1977年。（英文名：*Advanced Business English Dictionary, English-Japanese/Japanese-English*）

既刊の『**現代ビジネス英語大辞典**』の全面改訂版。専門用語を英和・



和英の形式で約 8 万語収録。

改訂版，グローバル・マネジメント・グループ編，本文2128ページ，PMC 出版，1987年。英和 5 万語，和英 6 万語。重要な用語には熟語・慣用句・連結語・例文等を付けてある。

——『マグローヒル科学技術用語大辞典』本文1551ページ，日刊工業新聞社，1979年。(英文名：*McGraw-Hill Dictionary of Scientific and Technical Terms*)，第 5 版，本文1877ページ，1994年。原著は第 5 版，1994年が最新。

——藤岡啓介，他『科学技術35万語大辞典』英和編（全2073ページ），和英編（全1767ページ），アイビーシー，1990年。

——富井篤編『科学技術英和大辞典』全1989ページ，オーム社，1988年。

——富井篤編『科学技術英和大辞典』全2290ページ，オーム社，1993年。

対象分野の広さ，用例の多さの点で優れている。

——日本規格協会編『JIS 工業用語大辞典』第 4 版，1995年。

——長谷川啓之編『英和経済用語辞典』富士書房，初版1974年。新版1991年。(英文名：*English-Japanese Dictionary of Economic Terms*)

経済専門用語を中心に，約 3 万語を収録。大学の「外国語講読」の参考書として最適。同系統の辞書として下記がある。

——長谷川啓之編『英和和英経済用語辞典』富士書房，1980年。

——長谷川俊明『ローダス法律英語辞典』東京布井出版，1991年。

英語の表現面への配慮も行き届いている。

——Daniel Oran 編，黒川康正・西川郁生監訳『英和アメリカ法律用語辞典』PMC 出版，1990年。

——小川冽・鎌田信夫編『現代英和会計用語辞典』同文館，1991年。

——森脇彬編『英和経営経理辞典』中央経済社，1991年。

——野田信夫編『新経営英和辞典』全451ページ，ダイヤモンド社，1985年。(英文名：*New Management Dictionary English Japanese*)

成蹊大学学長も勤めたことのある経営学の泰斗である1893年生まれの編者が、77歳にして独力で完成させた経営管理用語辞典。

なぜ自分一人でこの辞書を作る必要を感じたかを、編者は「序文」の中で次のように述べている。

しかしながら、辞典の編著というものは、命とりの仕事だというのはなしも聞いている。この辞典は全く私一人で全語彙を集め、訳し、説明した。まことに精力と絶えざるねばりを要する仕事であることを身をもって体験した。そして、その間に消化器潰瘍のため手術をし、何回か入院もした。それでも、幸いにも命をとられずに、出版にまでこぎつけたのは、ひとえに多くの人の同情と老妻の内助とダイヤモンド社書籍編集部の協力のおかげである。

私が人の助けをかりず、また経営管理各分野・各産業界のそれぞれの専門家に委嘱もせず、一人で編著を思い立ったのは、自分の思うとおりの編成をし、経営・生産・人事・労務・労使関係・財務・会計・マーケティング・流通・コンピューターなどの諸分野、および農・工・商・保険・取引・金融などの諸産業にわたって、大体において均衡のとれたことば選び・訳語選び、説明づけを試みるためには、自分一人で一貫してやらないと首尾を全うし難いと考えたためである。そしてそれは、私がその地ならしの仕事をしておかないと、いつ誰がそれをしてくれるかわからないと思えたからである。

昭和60（1985）年2月、編者はこう述べている。

編者もようやく年齢90歳に達し、自力での増補訂正は、今回をもって終わる。経営管理の進歩変遷は早くかつ大きいので、今回の増訂も大幅で、初版本の約2割増に達した。幾分責任を果たしたかと思う。

今日に生きる名著である。

——主幹堀内克明『最新英語情報辞典第2版』小学館、1986年。（初版1983年）（英文名：*The Shogakukan Dictionary of New English*）

今日の新聞・雑誌にでてくる最新語3万5000。最新の時事・現代用

語（経済1000項，他）。

——岩津圭介『ジャンル別最新日米表現辞典』小学館，1984年。（英文名：*The Shogakukan Dictionary of Current Terms*）

現代用語 1 万5000を網羅，158のジャンル別配列。時事・現代用語—  
経済400項，金融・株式500項，他。

——磯部薫編『コンサイス時事英語辞典』三省堂，1993年。

これ 1 冊で新聞・雑誌の英語が読める 4 万1000語を収録。

——日経編『経済新語辞典』1996年版，日本経済新聞社，1995年。

毎年秋口に発行される新語辞典。英和辞典ではないが，見出し語の  
英訳が参考になる。（金融用語辞典については，次項で述べる。）

## 5 橋本光憲・信達郎編『英和金融用語辞典』と同類の辞典

(1) 橋本光憲（辞典の部）／信達郎（資料の部）編『英和金融用語辞典』——  
辞典582ページ（和英基本用語集を含む），資料118ページ，ジャパニ タイ  
ムズ，1995年。（英文名：*A Glossary of Financial Terms*）

最初に「まえがき」を再録する。

### ま え が き

日本の国際化とともに，金融業務も国際面のウェイトが高まり，金融技術も複雑化の一途をたどった。金融機関はもとより一般企業の実務家にとっては，今や国際金融の知識は不可欠のものとなっている。しかし，海外取引と直結する金融英語を理解するための専門辞書が見あたらないのが実情であった。こういった需要を背景に，ジャパニ タイムズ社の求めに応じ，丸2年がかりでこの『英和金融用語辞典』を編纂することができた。自画自賛になるが，本書は本邦初の本格的「金融英語辞典」である。

「辞書の部」の編者である橋本光憲は，都市銀行の一つに30年職を奉じたが，この間，主に外国為替，融資関係業務に従事し，現在は教職にある。これらの経験

を踏まえてまとめたものに、日本経済新聞社刊『経済英語英和活用辞典』(*A Dictionary of English Usage for Business and Finance*)がある。同辞典にも金融用語を収録したが、今回は手持ちの資料から合計14,300の用例全てを投入するとともに、最近の内外文献を広く渉猟して、データの充実を図った。

一方、編集の早い時期から、金融の専門辞書として、「資料の部」を分離・独立させて内容の充実を図ることが必要との意見が一致し、学界の畏友、信達郎氏にこの役割を委嘱した。同氏は、豊富な国際金融実務の経験を持ち、特に資金の調達・運用サイドに詳しく、今回の「資料の部」を専門家の立場でわかりやすくまとめていただいた。このことは、本辞典の実用性を高めるのに大いに寄与するものと、感謝している。

このようにしてできた本辞典の特色をあげれば、以下のとおりである。

### 1. 用語の充実

英和金融用語辞典として第一に求められるのは、用語の充実である。

- ・見出し語および本文中用例の中でゴシック体活字で表示したいいわゆる準見出し語は合わせて約15,000と類書を圧倒している。
- ・金融用語を中心に、関連・周辺分野約40をカバーし、網羅性を高めた。ただし、解説は金融関係を主とし、他分野の説明は簡略にした。

### 2. 多様な語義

英文を読み、翻訳する場合に辞書を使っていて困るのが、訳語が少ないことである。

- ・本書では、見出し語のみならず用例においても、語義を充実させた。

〔例〕 **benchmark** 水準点 基準 基準指数 基準銘柄 指標銘柄

- ・なお、「辞書の部」の521ページより収めた「和英金融基本用語集」は、英訳にも役立つ。

### 3. 解説の重視

英和用語辞典の限界に挑戦して、随所に用語解説を織り込んだ。

- ・第一には、記号▶を付して、その後に各種の解説を行った。〔参考〕で示したものの数多い。あるいは、簡単に( )内で説明したものもある。

〔例〕 **a telephone transfer** 電話振替え(電話指示による預金振替え)

- ・別項の「資料の部」も、その一助になろう。

### 4. 単複の区別

用語・用例面で、名詞の単複の区別を明示した。類書にない試みである。

- ・実際に英文を書く場合、特に、名詞の単複の使い分けがわからないことが多い。そこで、主要な見出し語である option, price, reserve などについて説明を付し、他の場合にも応用できるようにした。

〔例〕 **reserve** 準備金 ▶ reserve は状況により単数形でも複数形でも使われる。会計科目としては a を省略して使われることが多い。

- ・二語（以上）見出しについては、状況次第で複数形で示したり、言葉の後に a, an, the を付けたり、あるいは何も付けなかったりして、用法の区別をした。もちろん、用例では単複を全て明示した。

## 5. 新語の収録

日々生まれる新語の収録には一定の限界はあるが、極力努力した。

- ・最近の金融ハイテク用語については、オプション取引、スワップ用語を中心に、各種文献に当たって、できる限り収録した。

〔例〕 **cap** 上限金利/**collar** 金利の上限・下限付き組合せオプション取引/**coupling** (各国金利の)連動性/**Daimyo bonds** 大名ボンド ▶ 円建て外債の一種で、世界銀行債として発行されたものの総称/**netting** ネットティング契約 ▶ 交互計算、相殺等により、債権・債務の正味残高を算出すること/**sushi bonds** スシ・ボンド (寿司は日本人しか食べないものという意味での)日本のユーロダラー建て債

- ・その他、収録した M&A 関係用語、ディーリング関係用語

〔例〕 **the black knight** [M&A] 黒の騎士, **the crown jewels** [M&A] 会社の主力部門 最優良資産

**MIO** [略語] [ディーリング] ミリオン (million の省略形)

**nothing** [ディーラー用語] 流し (興味なし)

## 6. 「資料の部」

「辞典の部」を補完する形で、別途「資料の部」を設けた。

- ・「資料の部」では、「辞書の部」で示された用語・用例とその訳語や解説を、金融の主要テーマ別に整理・統合した。一方、「資料の部」自体が単なる資料の域を越え、金融実務のアウトラインを総括的に網羅した専門書としての体裁を整えているのが、特徴である。
- ・具体的には、金融関連のディレクトリーの他金融実務の基本的な概念から始まり、資金の調達・運用、銀行取引、貿易取引、リースさらに外貨建て社債手続き、アニュアル・レポートにいたるまでの分野をほぼ全域にわたってカ

バーしている。

また、「辞書の部」とは別に、各分野でよく使われる用語を取り上げ解説を加え、参考資料としても十分に役立つように、工夫を施した。

本辞典の制作は、92年4月の基本構想をもとに金融用語資料をデータベースとして、ほぼ3年にわたる校訂作業を経て、完成した。

この間、本編の英文全般にわたって、ネイティブ・チェックを入れてくれた在カナダのポール・フォード氏、全般的に内容を校閲して下さった小浦博戸板女子短期大学教授、また終始援助を惜しまれなかった(株)ジャパン タイムズの斉藤純一出版事業局長、道又敬敏氏、校訂面で全面的にご協力いただいた(株)学際の際の則武政邦社長およびスタッフの方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

また、参考にさせていただいた文献の主なものは、「参考文献」として掲げたが、中でも一部の利用を認めて下さった『国際金融実務のキーワード』、日経文庫『金融証券英語辞典』の著者ならびに出版社に、ここに謝意を表させていただきます。

本辞典が読者の皆さんの期待にかなうことを願いつつ

1995年2月

編者代表 橋 本 光 憲

上記諸点について、本書の「帯紙」では以下のように集約して述べている。

基本用語からデリバティブまでを網羅した  
わが国初の本格的金融英語辞典!!

見出し語、用例合わせて約18000語を収録。

巻末には英訳に便利な〔和英基本用語集〕を収録。

資料の部では外国為替取引の仕組み、アニュアル・レポートの読み方、主要金融機関の正式英文名称などの国際金融業務に関する基礎情報を豊富に収録。



## 6 大特色

- 用語の充実 類書を圧倒する18000語（見出し語＋用例）を収録。
- 多様な語義 あらゆる金融実務に対応するため、豊富な語義を紹介。
- 新語の収録 オプション、スワップを中心に最新の金融ハイテク用語をカバー。
- 解説の重視 英和用語辞典の限界に挑戦して、随所に解説を織り込む。
- 単複の区別 日本人が苦手とする単数・複数の区別を明示。
- 「資料の部」 国際金融実務のアウトラインを総括的に網羅。

## (2) 同類の辞典例

- 花田実編『和英金融用語辞典』ジャパン タイムズ，1985年。
- 安田信託銀行『ファンダメンタル1200和英金融用語辞典』経済法令研究会，初版1990年，改訂版1994年。
- アイ・エス・エス編『英和・和英金融用語辞典』WAVE 出版，1992年。
- 井上邦夫『英和国际金融経済辞典』研究社出版，1993年。
- 日本証券経済研究所編『ファンダメンタル1200和英証券用語辞典』経済法令研究会，1994年。
- 山口雅仁編『シソーラス式金融・経済和英小辞典』大修館書店，1995年。
- 山岡洋一訳『IFR 国際金融用語辞典』ビジネス教育出版社，1995年。

## 6 田久保浩平・橋本光憲編『英文ビジネスレター文例大辞典』

- 田久保浩平・橋本光憲編『英文ビジネスレター文例大辞典』全1120ページ，本文1076ページ，日本経済新聞社，1995年。（英文名：A Dictionary of English Business Letter Expressions）

編者代表田久保浩平，編集主幹橋本光憲，和訳校閲・監修田中武雄の三名

と、制作担当(株)学際の共同作業により成る一冊。「日本語で発想、英語で表現」をモットーに、文例1万5000を大・中・小の3項目に分類し、一文まるごと引き出せる新機軸の「和文→英文」訳辞典。(田久保、橋本がそれぞれ文例の半分を提供)

編集協力にビジネス英語界の有力メンバー十二名を迎え、その中の青山保、岡本祥子、金谷良夫、山内清史の四名は神奈川大学のメンバー、関根幸雄、信達郎両氏も元メンバー、編者両名と合わせ、文字通り神奈川大学の強力メンバーによる布陣で、編集に当たったもの。

本辞典の内容、特徴などについては、以下の「まえがき」と、「この辞典の構成と使い方」の中の「分類項目」を引用して説明する。

#### ま え が き

本辞典は、「日本語で発想、英語で表現」(Think in Japanese, Express in English)するための英文ビジネスレター表現辞典です。ただし、レターとはいっても、対象は社内連絡、電報、テレックス、ファクスまで含んでいます。ことにファクスは手間もかからず、料金も安いため、ビジネスの世界ではファクスによるレター(faxed letters)が主流になっています。その意味で、われわれ編者はファクス文例を含めてビジネスの分野における各種の表現を、この辞典に極力幅広く盛り込むよう配慮しました。

では、なぜ「日本語で発想、英語で表現」する手法——これは最近見直されてきたことですが——に、特別の意義があるのでしょうか。今まで、皆さんも“Thinking in English”(英語で考える)とか、「英英辞典利用の勧め」などについて聞いたことがあると思います。確かに、これは英語学習の一段階としては有効でしょうが、決してこれが全てではないのです。

「聞く、話す、読む、書く」の言語の四技能の中でも一番難しいとされるのが「書く」技術であることは周知の事実ですが、「レターを書く」という最も困難な英文ライティングの作業に、なぜわれわれ自身の日本語能力を活用しないのか、編者がかねがね抱いていた疑問です。いくら英語の達者な日本人でも、母国語である日本語より英語が上手なはずはないでしょう。もっと初歩のレベルの人なら手紙の骨子のメモを書いて、それを膨らませたり削ったりして、言いたいことをまと

めます。あるいは、日本語で全文の下書きを作るでしょう。これこそが日本語で考え、構想を練り、修正をするスタイルなのです。

そういった発想でできた文章を、英語に切り換えればよいのです。日本語を英語に切り換える道具の筆頭に、和英辞典があり、特に、いくつかの和英辞典は日本語のニュアンスを細かく分類して、国語辞典より優れた面があるというのが定評です。しかし、和英辞典は様々なスピーチ・レベル（文語、書き言葉、口語、俗語、卑語など）の表現例が混じっていて、初心者は使いづらいところがあります。また、ビジネスに特化しているこの手の辞書はほとんどありません。

ここに、われわれが「和文英文辞典」の集大成として、この辞典を世に問う意味があると考えたからです。完成までには約3年半の日時を要しましたが、特に苦労したのは利用者が「日本語で発想」しやすくするため、求める英語表現に楽に「日本語でアクセス」してもらえる枠組み作りを行ったことと、発想の手掛かりとなる和文を整理分類したことです。

本辞典の主な特色として、以下の5点が挙げられます。

### 1. 英文用例が計15,000余りと類書の4倍強

この辞典は、発信元がアメリカ、日本、イギリス、オーストラリアなどの約2,000通の英文レターから実際の例を15,000余り抽出したものです。

従来のビジネスレターは、モデルレターを元にしてパラグラフや例文の一部言い換えの形をとっていて、モデルが多いものでも250～300通、応用文例にしてもその5～10倍というもので、多くても3,000例。また、プログラム作成上の問題もあるが、あるコンピュータのデータで定型文書例約160、用例約3,500、計3,660例であることから、本辞典の15,000例は他を完全に圧倒している。

### 2. ビジネスの場面設定を3段階に分類

項目を大・中・小項目に分けてありますので、ビジネスレターを作成する際、膨大な資料の中からの的確な文書を探す上で大へん便利になっています。

まず、様々なビジネスの流れを大きなカテゴリー（大項目）でとらえ、次に切り口をやや狭めた状況（中項目）に絞り、さらに具体的場面（小項目）で選別してありますので、何度か本辞典を利用していくうちに目的の文書がすぐ見つかるようになります。

### 3. キーワードは五十音順に日本語で引ける

小項目での文例のキーワード、キーフレーズ（ゴシック体で表示）が五十音順に並んでいますので、目的の表現はさらに速く見つかります。

#### 4. 英語表現へ導く「日本文」

実質的に「見出し」の役割を果たすことになる日本文の訳出に当たっては、最大限の努力を傾けました。方針としては、英文と和文が対応するように、原文に極力忠実に翻訳する一方、定型化した英文の結びなどは短く意識してあります。また、キーワード、キーフレーズは極力一続きで和訳しました。

#### 5. この辞典の「活用のためのガイド」として4編を収録

- (1) 「この辞典の構成と使い方」
- (2) 「ビジネスレターの書き方」
- (3) 「場面別モデルレター15選」
- (4) 巻末「索引」

最後に、本辞典の企画を採り上げ、長期化する作業を温く見守って下さった、日本経済新聞社出版局編集部の増山修氏、原稿制作・校訂面で全面的にご協力いただいた(株)学際(がくさい)の則武政邦社長とスタッフの方々、英文チェックをしてくれた在カナダのミリュエル・ベルーブ氏などの皆さんに、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

NEC、また中央経済社及びに研究社出版関係各位のご協力に対して、ここに謝意を表させていただきます。

「日本語で発想、英語で表現」と銘打った本辞典が、利用者各位のご支援をいただきながら一層価値のあるものになることを期します。

1995年9月

編 者

#### 本文——「分類」項目 (小項目は目次を参照)

##### 「大分類」10項目

##### 「中分類」38項目

- |          |                               |
|----------|-------------------------------|
| 1. 挨拶    | 挨拶状, お祝い・慰労・謝辞, お見舞い・お悔やみ, 招待 |
| 2. 訪問・会議 | 会見, 紹介状, 準備, 会議・商談            |
| 3. 手配    | 依頼, 送付, 照会, 採用                |
| 4. 取引    | 売込み, 引合い, 注文                  |
| 5. 契約    | 契約の履行, 決済方法, 支払い, 積出し         |
| 6. 折衝    | 交渉, 苦情                        |
| 7. 処置    | 確認, 催促, お詫び                   |

8. お礼 挨拶に、訪問に、手配・配慮に、成約に
9. 手紙の 前文、本文（本文の前段）、主文（本文の後段）、末文、  
決まり文句 結び、修飾句、信用調査、業者紹介、紹介状、社交文
10. 分野別専門用語
- \* 大分類の1.から8.項目まではビジネスの流れに沿った文例が列挙してある。9.の「手紙の決まり文句」ではパラグラフごとに分類した決まり文句が提示され、10.の「分野別専門用語」には、ビジネス用語が24ジャンルに分けて整理されている。

次に「帯紙」の文言を記載しておこう。

「日本語で発想、英語で表現」  
を実現した画期的辞典

何度も辞書を引いて単語を拾い出す煩わしさを一挙に解消。まるごとピックアップした文章をつなげるだけで、完璧な英文ビジネス手紙が作れる、スーパー大辞典。

圧倒的な1万5000文例

文章作成が驚くほど簡単に

「日本語で発想、英語で表現」  
するための文例1万50000！

【本辞典の特色】

- 実際に取り交わされた英米からの2000通以上の手紙が基本資料。「活きた英文」1万5000例は他に類を見ない圧倒的な数。
- 探したい表現に様々な角度から確実にたどりつける、大中小3段階の項目絞り込み方式を採用。巻末のキーワード索引からもアプローチできる使い勝手の良さ。
- 同一内容の表現をグループ化してあるため、お決まりのパターン表現だ

けではなく、微妙なニュアンスの違いに応じて、自由に文章を選べる。

●巻頭にビジネスレターのフォーマット例などの基礎情報を掲載。いちいち他の文献を当てる必要がない。

●「手紙の決まり文句集」には、書き出しや結辞についてのバラエティーに富んだ表現を収録。

## 7 実用英作文辞典・マニュアル類

前項の田久保浩平・橋本光憲編『英文ビジネスレター文例大辞典』もその一つであるが、その他の実用英作文辞典・マニュアル類も一通り挙げておきたい。

- (1) 藤田栄一編『和英貿易実用辞典』全896ページ、本文809ページ、創元社、1976年。(英文名：*The Japanese-English Dictionary of Trade and Business*)

貿易を中心とするビジネスの場で使用されることはもちろん、一般的な日常生活の実用的な目的にも適うよう豊富な内容を心がけている。実用的に活用されるために、できる限り、専門的用語や表現を収録し、また、日常的な語句も多く取り入れた。

1. 日本人として英語よりも日本語の方に慣れた読者のために、従来の「アルファベット」順に語句を並べることを止めて、日本語式の「あいうえお」順に語句を配列した。
2. 上記の方針に従って「見出し」は日本語で示した。すなわち、漢字または平仮名、片仮名を見易いゴシック体で配置した。これにより、日本語で目的とする語句を容易に選び出せるので、明快で使い易くなっている。
3. 語句の配置は各見出しの項目内において、おおむね、名詞句、副詞句、形容詞句、動詞句、例文の順序で示してある。



4. 動詞と前置詞や名詞との結びつきを示す連語もできるだけ豊富に示してある。  
(「はしがき」「本書の特色と使い方」より)

- (2) 松本安弘・松本アイリン『組立式英文ビジネスレター辞典』全775ページ、北星堂書店、1985年。(英文名：*The Building Block Style Handbook of Business Letter Writing in English*)

本書は、さまざまな内容のコレポンでよく使われる決まり文句 (Set Phrase) を辞書式に収録してあるから、読者はまず自分で日本語の文案を作り、その文句を順次、本書を引いてそれぞれ対応する英文に直し、それらをつなぎ合わせてゆくと、自動的に所要の英文レターが出来上がる仕組みになっている。  
(「まえがき」より)

第7章の「各種の決まり文句」で「あいうえお」順に230ページ程、パラグラフで文例を示している。

- (3) フランシス・J・クディラ『最新ビジネス英文手紙辞典』増補新版、全794ページ、朝日出版社、1994年。(初版1986年) (英文名：*Dictionary of Proven Business Letters, Revised Edition*)

この辞典のねらいは、手本となる上手な手紙のデータ・バンクを読者に提供することである。ここには、ビジネスで直面する広範な場面を網羅した278通の手紙が収録されている。  
(「まえがき」より)

「帯紙」では、そのまま使える完全手紙辞典〔全文和訳付き〕、差し換え例文、和英索引で書きたい英文が自由自在、と銘打っている。

- (4) マーク・デニン、ダック・ジャクソン、クリス・マティソン著、長野格、秋山武清、木村均訳注『応用自在の英文ビジネスレター・ハンドブック』全622ページ、研究社出版、1988年。(英文名：記載なし)

本書はコンピュータ・ソフト『ABC・タイプ・ライト』に含まれる文例をもとにしたもの。

本書には約300のビジネス通信文例が収められている。その状況は非常に多岐にわたっている。各例文はマティソン、デニン、ジャクソンの3氏が実際の例を集め、それを利用者の便宜を考えて、丹念に編集したものである。

さらに、われわれ日本人が訳例と解説を行なった。 (「はしがき」より)

- (5) 池崎美代子監修『英文海外ビジネス活用全書』(活用自在, ビジネス英文レター書きこなし事典) 全638ページ, 日本実業出版社, 1992年。(英文名なし)

執筆グレゴリー・M・イワタ, 日本語訳岩田利江。

本書は, 日常のビジネスシーンを想定し, その基礎となる140の英文レターをあげ, それに相当する和文レターと見開きで構成しました。

それぞれの文例には, 文書作成時のポイント解説となる「レターのポイント」, 使用されている語句, 表現についての「ワンポイント・レッスン」, 基礎文例から様々なシーンに発展させる「すぐ使える言い換え表現」を設けました。 (「はじめに」より)

- (6) 染谷泰正『最新英文ビジネスレター作成マニュアル』全427ページ, 小学館, 1989年。(英文名: *Business Letter Writing Manual*)

本書は, 毎日の業務のなかで実際に各種の英文レターを書く必要にせまられているビジネスマン, エンジニア, 秘書, OL のための「実用的ガイドブック」である。実用書であるから, できるだけ現場の実情に即した問題を中心にとりあげた。また, 図解や実例をふんだんに使って, わかりやすく具体的に解説したつもりである。

第4章には50の基本文例と201の標準パラグラフを収録した。

(「まえがき」より)

本書は, 同一著者による『はじめての英文ビジネスレター』(アルク, 1990年)と同様, 手紙のレイアウトの解説の面で優れている。

- (7) マイケル・T・ホルト『英文ビジレター実例集』(原寸大・1ページ1例) ジャパン タイムズ, 1988年。(英文名: *BUSILETTER*)

- (8) ロイ・W・ポウ『マグローヒル版英文ビジネスレター』ジャパン タイムズ, 1988年。(英文名: *The McGraw-Hill Handbook of Business Letters*)

## 8 今後の方向

実用英語、実務英語、専門英語、専門家英語、特殊英語あるいは商業英語といっても、必ずしもそれぞれに明確な位置付けがあり、分野が設定されている訳ではない。

実用英語について言えば、日本実用英語学会 (Japan Association for Practical English) は、「役に立つ英語」を理論と実践面から研究することを目的としている。また、戦前からの伝統がある日本商業英語学会 (The Japan Business English Association) では、「商業英語学」および関連科学の研究を目的として掲げている。

日本商業英語学会は、研究対象として単に Business English を掲げるのは適当でなく、International Business Communication (国際ビジネス・コミュニケーション) とすべきであるとして、学会としての改称論議も盛んである。

この点では、国際ビジネスとコミュニケーションの両側面を統合した学際的研究であるべきとして、英語に余りウエイトを置くことを嫌う傾向が一部に看取される。

### (1) 研究対象領域

筆者は、ESP (English for Specific Purposes — 特殊な目的のための英語) の立場で、実用英語 (Practical English) 全般を研究するものである。そして、ESP の中心的存在として Business English を積極的に評価している<sup>9)</sup> 一人である。

日本商業英語学会関東支部が、1993年1月に開催したパネル・ディスカッション<sup>10)</sup>でも、パネリストの一人として、次のように発言している。

もうひとつ私が当学会で発表しましたのは、ESP (English for Specific Purposes) の問題です。これは商業英語学自体が ESP として認識されている、研究されているという度合いが少ないのではないか。ESP の発展した分野としての貿易英語があり、その他さまざまな実務分野の英語がある。私はそういう立場に立っておりまして、そういうものをどんどん広げていくということの有効性、同時にそういう専門英語が逆にコミュニケーションのための有効な手段として跳ね返ってくると考えております。

この点は、当初日本商業英語学会 (1991年——注9参照) で発表時のレジメ (下記) から明らかなである。

ESP としての商業英語 (Business English)

- (1) ESP (English for Specific Purposes ——物殊な目的のための英語) の一分野として商業英語を位置付ける考え方は、あまり議論されていない。
- (2) その原因は、ビジネスは対象分野として極めて大きく、一般英語 (General English) と広い共通基盤を持つことにある。
- (3) 現実には、対象領域の大部分は貿易英語であり、これに金融英語、証券英語、保険英語などが付加されているということであろう。
- (4) その場合、それぞれの領域に見合った専門用語の語彙、慣用句、表現例などの調査、研究がなされるべきであるが、それ程推進されていない。

筆者は、一方で金融 (Banking and Finance) を専門としており、「金融の ESP」の有用性に着目して研究を進めている。

従って、「商業英語を ESP の一分野として研究する」(中邑光男氏)<sup>11)</sup>とまで明確にいうと、事態が紛糾するのではないと思われる。

筆者の発言は、「ESP の一分野として商業英語を位置付ける考え方」の可否をもっと議論し、煮詰めてはどうかという提案に止っているものであり、決して ESP を正とし、almighty な道具として捉え、推奨するということではなく、またそこまで研究を深めている訳ではない。

Business English を ESP の一分野として位置付けることは可能であろう

が、International Business Communication となると話は違ってくる。International Business は、英語では包括できないし、Communication も英語以外の要素が多い。

ESP の世界で有名な The tree of ELT (English Language Teaching)<sup>12)</sup> では、EFL (English as a Foreign Language) という幹の 2 本の太枝として GE (General English) と ESP (English for Specific Purposes) を位置付けている。

そして、ESP の枝分れとして、EST (English for Science and Technology), EBE (English for Business and Economics), ESS (English for Social Science) の三つを見ている。

その先は、EAP (English for Academic Purposes) と EOP (English for Occupational Purposes) が、どの枝からという区別なしに小枝となっている。さらにその先は枝葉になる。

筆者の得意とする English for Banking and Finance (金融英語) は、さしずめその枝葉の一つになるのだろう。ただし、これらの全て、すなわちこの樹が、Learning と Communication という土壌に深く根を下していることを忘れてはならない。

秋山武清教授は、「商業英語は ESP の一分野として研究すべきであるという見解 (橋本, 1993) もあるが、商業英語学の立場からは異論もある<sup>13)</sup>」と述べておられるが、これにはやや誤解がありそうである。

ESP 研究の提唱者の一人として、この名誉ある誤解は有難く受け留めなければならないかも知れない。しかし、「商業英語を ESP の一分野として研究するという切り口は最近注目を浴びている (中邑光男氏)」ことの名誉は、同氏や日本における最初の唱導者である平田重行教授<sup>14)</sup>に属すべきものである。

## (2) 今後の研究に向けて

筆者は、日本商業英語学会において、「商業英語における用語・用例集の必

要性」<sup>15)</sup>と題して、今後の研究に向けて自らの所信を明らかにしている。以下にそれを再録する。

最近、当学会においても、語彙研究、専門英語研究が盛んになりつつあるのは、大いに結構なことである。個別的な語法研究においても、当然全体的な言語像の把握の上に立った研究であるべきであろう。論者は、これまで2, 3の辞書作りに係わった経験から、商業英語における用語・用例集の必要性を感じており、またそれが商業英語学の基盤をなすものと考えている。

(1) 『経済英語英和活用辞典』について

国際ビジネス・コミュニケーションの立場で考えた時に、商業英語においては、一般英語とは別の言葉の語義や数多くの基本的表現がある。

小著『経済英語英和活用辞典』（日本経済新聞社、1991）は、見出し語数5,300、用例23,000であるが、用語の定義も用例も特殊化・専門化しており、とても一般英語で対応出来るようなものではない。

(2) 用語・用例集の最近の傾向

専門用語の語彙を集めた用語集については、これまで少なからぬ実績があるが、基本的用例を集約した用例集については、まとめられたものはあまりない。

最近、英語を輸出産業としている英国からコリンズ・コウビルド英語辞典（1987、コンピュータ・データベース編集）を始め、Longman Language Activater（1993）、Business English 関係ではOxford Basic English Usage（1984、1992）、Oxford Dictionary of Business English for Learners of English（1993）、ロングマン・ビジネス英語実例用法辞典（1992）と続々出版されている。

日本でも、長野格、中邑光男氏等はコーパスの蓄積をされているようであるが、是非語彙レベルだけでなく用例レベルまで拡大されることを望みたい。

筆者は、現在三人の共同編集（和訳協力者7名）により、『英文ビジネス・レター文例辞典』を手掛けている。英作文は本来パラグラフ・レベルで考えられるべきであるが、それでは収容に限度がある。そこで、読者の日本語の作文能力に信頼して、用例約1万4千（既往同種書の3倍強）を集め、機能別・状況別に分類して、和訳表現をインデックスに「日本語でアクセス、英語で表現」するための辞書作りを行っている。



### (3) 日本人向けの専門用語集について

専門用語については、ロングマン・ビジネス英語辞典（収録項目は1万3千余）は、全体を語義別に会計学、宣伝・広告、農業、銀行、商業、商品取引、コンピュータ、経済学、財務、産業、労使関係、保険、法律、経営、財政、品質管理、株式、税務、運輸、旅行業など、26分野に分類している。（この点では、わが商業英語学会も、その対象を明確にする必要がある。）

ロングマン辞典は、約2,000語の restricted vocabulary で解説している点で、われわれ非英語国民（non-native English users）にも役立つ。一連の Elsevier's Dictionary は、対訳用語集で終わっている。日本人に本当に必要なのは、専門分野でも基本語と関連形容詞・前置詞、対応する動詞の使い方までを含んだ専門用語集である。

筆者は、この方面では『英和金融用語辞典』（本来的には glossary = 用語集、ただし、一部文例を含む）の編集を進めている。平田教授の外国為替の英語の編纂も進捗していると聞く。本学会の会員諸氏が、それぞれ自分の得意分野でこのような作業を始められるよう期待したい。何故ならば、そのような努力が、空理空論でない真の学的前進、ひいては学会発展につながるものと筆者は信ずるからである。

上記論文発表時点（1993年10月）以降、『英和金融用語辞典』（辞書の部編）（1995年4月）、『英文ビジネスレター文例大辞典』（編集主幹）（1995年10月）を順次完成、刊行することができた。

## お わ り に

一人のユーザーとして始まった筆者の実用英語との付き合いは、半世紀に近付こうとしている。この間、辞書の制作者側に回って、『経済英語英和活用辞典』『英和金融用語辞典』『英文ビジネスレター文例大辞典』の3部作を世に送り出すことができた。もちろん、これは関係者、周辺の皆様と読者の方々の支援があつてのことである。

当然のことながら、英語の辞書作りには、一定の「英語力」がいる。これ

には時間をかけた蓄積（材料収集を含めて）が不可欠である。そして、辞書作りなりの「スピードと判断力」も求められるし、長期間の課題をこなす「ねばり」も必要であろう。出版に漕ぎ付ける「チャンス」も生かせるものでなければならない。

先達によれば、辞書作りという仕事は、「胃の一つや二つを取られてもおかしくない」大変神経を使う仕事といわれる。筆者が携ったのは、学術的というよりは実用的な辞典であり、その負担の度合は、やや軽かったろう。また、実務の世界で、全体を見ながら数多くの個別的決定を下すという仕事に長く従事してきたことも、今日の辞書作りには役立っていると思われる。

ただ、大して健康を害することもなく、しかも比較的若さを維持しながら、辞書作りに注力できたことは、人とはやや違っている面があることを認めなければなるまい。もし、それが家人に指摘されるような一種の図図しさないしは無神経さに一因があるとすれば、大いに反省しなければならないし、内心忸怩たる思いである。

筆者は、一方では金融を専門としており、大学では銀行論、外国為替論、商業英語、国際コミュニケーション、外国書講読、演習を担当している。これらの教育・研究は仕事の基本であるが、世に送り出した3冊の辞書のメンテナンスも今後の一仕事であろう。

時代は「のりとハサミ」の手造りの辞書作りから、スキャナー読み取り・コンピュータ編集へと変わり、仕事も大分やり易くなっている。筆者は更に可能であれば、ESP (English for Specific Purposes) を背景とした『分野別専門用語辞典』（英和・和英）と、積み残しとなっている『金融英語辞典』（単なる用語集の域を脱した）の実現に、今後取り組みたいと願っている。文例辞典の方では、Director's Letters（役員書簡）が課題である。

まことに、「辞書屋人生」の夢は果てしないのである。

最後になったが、外語の大先輩である岩崎民平、津村和夫、小川芳男の3先生に感謝しなければならない。岩崎先生は英語辞書界の泰斗であり、手許

用のポケット英和辞典でお世話になり、小著『経済英語英和活用辞典』の作成に当っては、先生編の研究社『英和中辞典』を語義のベースとして利用させて頂いた。

津村先生は戦後台北高商を引き揚げられ、小生勤務先で英語関係の嘱託をしておられ、外国部で陰に陽にご指導を頂いた。長年ラジオ英会話を手掛けられた英語教育の大家、小川先生には銀行在職中以降も何かとご指導頂く機会に恵まれた。先生は大きな鞆の底に何時も中辞典を忍ばせておられた。

先生の教えに従って、私も『ビジネスコンサイス英和辞典』（三省堂）を常時携行している。実用辞典3部作を刊行することによって、3先生他の数多くの先生方の学恩に少しでも報いることができたとすれば誠に幸せである。

---

#### 主要参考文献

- (1) 『辞書・事典 全情報 45/89』日外アソシエーツ, 1990年。
- (2) 『BOOK PAGE 本の年鑑 1995』ブックページ刊行会, 1995年。
- (3) 『英語をモノにするカタログ'95』アルク, 1995年。
- (4) 加島祥造『英語の辞書の話』講談社, 1976年。
- (5) 「小特集：辞書——つくる人, つかう人——」『英語青年』第140巻/第7号, 研究社出版, 1994年10月。
- (6) 則定隆男『ビジネス英語を学ぶ・考える』英宝社, 1990年。
- (7) 秋山武清「羽田三郎教授とその学説——商業英語研究史上の位置づけ——」青山経営論集第26巻第2号, 1991年9月。
- (8) 羽田三郎「英語遍歴六十年——ABCからIBCへ——」日本商業英語学会関東支部研究会レジメ, 青山学院大学, 1995. 4. 15。

#### 注

- 1) 石橋幸太郎編『英語語法大事典』大修館書店, 1966年, 474, 475ページ。
- 2) 勝俣銓吉郎「辞典の編纂について」第6回日本商業英語研究会会報, 18, 19ページ, 日本商業英語学会会報復刻版昭和11~31年, 日本商業英語学会, 1990

年, 250, 251ページ。

- 3) 寺澤浩二編『経済英語和英活用辞典』日本経済新聞社, 全758ページ, 1985年。
- 4) 寺澤芳雄「解説と使用手引——The BBI Combinatory Dictionary of English」丸善, 無日付(ただし, 内容は注5)の日本語版序に同じ)
- 5) 寺澤芳雄監修『BBI 英和連語辞典』丸善, 1993年。
- 6) 石山輝夫「使える和英・英英辞典はこれだ! ——英英辞典の部」『Professional English』バベル・プレス, 1995年4月号。
- 7) 投野由紀夫「コウビルド英英辞典〔改訂新版〕使用の手引」桐原書店, 1995年。
- 8) 藤田仁太郎「英和貿易産業辞典の出来るまで——辞書の編纂を終えて」BUSINESS ENGLISH, Vol. XI, 商業英語出版社, 1955年9月号。
- 9) 橋本光憲「Business English から Special English へ——金融英語の ESP 教育について」『研究年報第51号 (1991)』日本商業英語学会, 1992年, 26ページ。
- 10) パネル・ディスカッション「21世紀の商業英語」『商業英語学を見直す——国際ビジネス・コミュニケーションの視点から』日本商業英語学会関東支部, 1993年, 19ページ。
- 11) 中邑光男「The Functional-Notional Approach による商業英語教育に関する一考察」『研究年報第54号 (1994)』日本商業英語学会, 1995年。
- 12) Tom Hutchinson and Alan Waters, *English for Specific Purposes, A learning-centred approach*, Cambridge University Press, 1987, p. 17.
- 13) 秋山武清「商業英語の研究と教育」『実用英語ジャーナル』第16巻第1号, 日本実用英語学会, 1995. 9. 23。
- 14) 平田重行「ESP への対応をめぐって——英文家の管見——」『大阪商業大学論集第82・83合併号』1988年10月。
- 15) 橋本光憲「商業英語を学問として高めるために——商業英語の用語・用例集編纂の経験を踏まえて」『研究年報第53号 (1993)』日本商業英語学会, 1994年。